

2021年度後期 授業に関する学部・学科・センター自己点検・評価

2021年度後期に授業アンケートにお答えいただきありがとうございました。

授業アンケート結果を参考にして、それぞれの先生が自己点検・評価をされました。学科長がそれらをまとめ、さらに学部長が総括をした自己点検・評価をここに掲載いたします。

良かったことはさらに継続し、改善すべきことは今後の授業にむけて学生のみなさんにフィードバックをしていきます。

今後とも授業改善のために、「学生による授業評価アンケート」や「授業について教育改善委員の意見を聞く会」にご協力ください。

2022年10月

目 次

文学部	1
人間科学部	2
教育学部	4
英語学科	6
日本語日本文化学科	7
総合文芸学科	8
心理学科	9
都市生活学科／生活学科都市生活専攻	10
食物栄養学科／生活学科食物栄養専攻	11
子ども発達学科	12
ファッション・ハウジングデザイン学科	13
教育学部	14
全学共通教育センター	16
キャリア教育センター	17
情報教育センター	18
外国語教育センター	19
教職支援センター	20
教務部	21

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 文学部

氏名 打田 素之

(1)教育実践の改善活動の成果

2021 年度後期は、対面を原則として、一部遠隔を取り入れた授業が行われた。また、両者を混合したハイブリッド形式は、準備が大変なのだが、先生方の御尽力のおかげで、全体としての教育効率、教育成果は、さらに向上している。

(2)さらに改善を検討すべき点

授業時間内に授業アンケートを行わなかった科目の回答率が極端に低かった。アンケートは、やはり授業時間内に行われるべきであろう。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点 (学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

文学部でも、今やパソコンを使っの授業は常態化しつつある。そんな中、特定のソフトが人間科学部の PC 教室でしか使用できないというのは、学部間格差の一つの現れと言える。大学、理事会には、文学部用 PC ルームの設置を要望したい。

また、1241 教室は大型スクリーンが装備されていて、大画面で映像を見せるのに適した環境が整えられているが、窓にはブラインドが取り付けられているだけなので、冬場の 3 限目以降の授業では、事実上スクリーンの使用をあきらめざるを得ない。遮光カーテンの設置を望む。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

先生方が学生のコメントに真摯に回答しておられるのは、成果だと思う。学科によっては、授業運営上の問題があることがわかり（私語の多いクラスは改善されるべきである）、これもまた改善活動が機能している証拠だと思う。

(5)その他(自由記述)

「女子学生が対象であるため、取り上げる内容や表現については配慮が必要である」との指摘があったが、当然の指摘であろう。教員は、授業だけではなく、配布資料、提示用動画の内容に関しても、細心の注意を払うべきである。

提出日：2022 年 7 月 11 日

所属 人間科学部

氏名 徳山 孝子

(1)教育実践の改善活動の成果

コロナ禍において、2021 年度後期は、多くの科目が対面授業を実施した。これまでの遠隔授業の経験を踏まえて、専任教員、非常勤講師ともに授業内容に沿って ICT を有効に活用しながら授業に取り組んだ。科目によっては、動画教材を用いて、事前学習や授業内での動画視聴などを取り入れた。特に、松蔭 manaba の活用は、個人指導をはじめ小テスト、アンケート、レポート、プロジェクトの機能を使い、学生同士の相互学習や学生の学修成果が上がるよう工夫されていた。先生方の ICT 活用は、学生の授業への満足度を高めた。

プレゼンテーションやグループワークなどアクティブラーニングを導入した授業では、活発な議論が生まれ、学生の主体的な授業参加が促進できた。

これらのことから、シラバスに示された到達目標に高い評価がえられたことから教育実践の改善活動の成果があったと考えられる。

(2)さらに改善を検討すべき点

ICT を活用した際、学生個々の参加や貢献の度を把握したり、成績評価に反映させることが難しい場合があった。また、少人数のゼミ科目では、積極的に参加する学生とそうでない学生の差が大きく、学生同士の議論が活発になりにくい、などの問題点が指摘された。

グループワークでは、自発的に参加しない（話に入らない）学生がいる場合は、毎回グループメンバーを変更するなどの対応策が必要であろうと提案があった。

今後は、教員と学生という縦の繋がりだけでなく、学生同士の横の繋がりの中で互いに学び合う機会を増やしていけるよう工夫することが求められる。

「コロナ関連の対応」に関するコメントが多かった。対面授業を基本としながらも、コロナ感染に配慮しながら演習やグループワーク等を行うことの難しさや、学生から提出される「対面授業欠席届」への対応に苦慮するといった内容が散見された。

科目の位置付けについて意見がある教員がいた。1 年次の学修成果が上位学年の科目で確認できているかについて聞くことで授業改善に繋げる。学生募集（入試制度）の状況も考慮しつつ、カリキュラムについて検討が必要であると示された。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点

(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

【学科としての支援すべき点】

都市生活学科：インテリアコーディネート実習について、現在は 1 単位の配当であるが、内容量や重要性から考えると 2 単位配当であっても良いのではないかという意見が担当教員（非常勤講師）から出された。実習内容等を学科内で確認し、現在の単位数が適切であるか検討する。

【大学に支援を要請すべき点】

524 教室設置の PC が立ち上がらない・立ち上がりが遅いなど、不具合が頻発する。ICT 教育を推進するにあたり、まずは老朽化した PC の更新が必要である。

現在の設備では、PC の基本操作や管理方法（アップデートなど）を学生に説明する際にも時間がかかり、授業運営に支障をきたしている。次年度のコース制導入および更なる ICT 教育の推進の見地からも PC 環境への早急な対応が求められる。

【学科が考える「FD委員会や教学が行う支援】

- ・対面授業と zoom 授業を同時に行う際の操作など、PC の扱いに不安を持つ教員、初めて授業を担当する教員に対する支援体制を整えていく必要がある。
- ・集中講義での授業アンケート実施が難しいという意見があった。アンケート実施方法の改善が求められる。
- ・配慮願いが出されている学生への卒論指導の難しさについての意見があった。配慮を要する学生への対応方法の研修など、実施の要望があった。
- ・自己点検票で経年変化が確認できる書式にして欲しいとの要望があった。
- ・過年度生のために設置された授業コード（配当年次生は別途授業コードが設定されている）で、誰も成績評価の対象とならなかった場合には、自己点検表（成績中央値）の入力を不要として欲しい、という意見があった。
- ・授業に関しては、遠隔授業時のカメラ機能の有効化や PC 環境の改善を求める声があった。
- ・授業外については、産官学連携やメディア利用についてもっと積極的に取り組み、学生が在学中にいろいろな体験、経験ができるようなサポート面での強化が望まれた。
- ・複数クラスを manaba でリンクした状態で授業評価アンケートを実施すると回答率に不具合が生じる（100%を超える）ため、支援の要望が出ていた。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

人間科学部、教育学部の教員は、授業アンケートの結果を受け止め、授業内容の改善に取り組んできたことが、自己点検・評価票より確認できた。今後の改善点などを適切に分析しており、改善活動は機能していたといえる。

(5)その他(自由記述)

提出日：2022年7月29日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 教育学科

氏名 谷川 弘治

(1)教育実践の改善活動の成果

- ① 各教員が個々の場に応じて、対面を軸に置きながら、多様な学習形態を取り入れていることは評価できる。
- ② 保育・教育の現場との交流を行っていることは専門職養成において不可欠であり、種々の試みがなされていることは評価できる。
- ③ オンデマンドで視聴できる教材、自主学習の教材が蓄積されてきていることは評価できる。
- ④ 教材のマナバなどでの共有の是非について教員の考え方に違いがある。そのような違いがあることが明確になった点は評価できる。

(2)さらに改善を検討すべき点

- ① 学科の点検コメントにある「コロナ対応の配慮願いに関する個別対応の難しさ」については、どのような内容の難しさがあったか、情報収集を行い、整理することが望まれる。学科として、コロナ対応が落ち着いた段階で取り組んではどうか。また、全学的な視野からの取り組みを、関係部署に要望したい。
- ② 授業への熱意における二極化は、コロナ禍のほか、保育・教育職に対する意識の多様化など、種々の要因が考えられる。これについて、学科において検討する機会を設けるべきと考える。
- ③ 「専門的内容理解に重点がいき、主体的に学ぶ仕組みを十分用意できなかった」「相互的な学習が課題」など、主体的、協同的な学びの仕組み作りを課題に挙げる教員がおられた。これは学科教員全体の問題意識でもあると考える。
- ④ ①②③を基盤に、学修成果の可視化をどうすすめるか、評価の公平性の説明などの課題に取り組んでいく必要がある。
- ⑤ 学外での見学や交流について、環境整備を検討する必要がある。
- ⑥ 教員の教育に対する考え方の多様性をお互いに理解し、対話を重ねていくことが課題である。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

- ① 配慮願いの提出されている学生について、学生支援室と学科教員との共通理解を深めるためのガ

イドラインの整備をお願いしたい

学科の点検コメント票に「配慮願いの信憑性に対する疑義が生じないよう客観的書類の確認などを徹底していただきたい」との要望が上がっていた。＜配慮願いの内容と教員がみている日々の学生の姿に乖離があるように見えている＞という問題と考えられ、配慮願いに係わる部署と学科教員とのコミュニケーションをいかに成立させるかという課題だと推量する。これについて、2022年度前期の事例では、学生支援室と学科の担当チームのコミュニケーションの機会を設けて、共通理解を図るなどの改善を図っている。

重要なことは、下記と考える。

- ・ (2) ①に示したように、コロナ対応において教員が感じた難しさについて、全学的に情報収集して、整理し、対応の基本をお示しいただきたい。コロナ対応にとどまらない有用なツールとなる可能性もある。
- ・ 学科側の窓口がどのようにできているとよいか
教育学科では、教員全員がばらばらに話し出すと混乱するため、支援チームを組み、情報を集約し、学科外の組織との共通理解をえた場合がある。そこまでしなくてもよいケースも多いが、このように学科の窓口機能や支援チームの結成などについて、一定のガイドラインがあるとよい。

② 施設設備の改善をお願いしたい。

学科の点検コメントにある以下の点は、関係部署でご検討願いたい。

- ・ 7号館のパワーポイントプレゼンがテレビのため、画面が小さく、見えにくいので改善していただきたい。
- ・ リズム室(545)の暖房(上から風が当たる)が一部の場所だけに直接当たり、学生らが学修しづらそうな場面が多くあり、苦勞した。部屋全体を温める(冷やす)ことができる空調をお願いしたい。

③ 学外での学生の活動を行いやすい環境づくりをさらに進めていただきたい。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

学科の点検コメントにあるように、各教員レベルでは、改善への努力が行われていることが確認できた。

学科単位では、学生の学修や生活面の指導及び支援について、種々意見交換がなされてきている。

2022年度に入ってから(3)に示したように学科内に個別対応の支援チームを設けるなど、2021年度の課題は引き継がれ、改善を目指してもいる。

(5)その他(自由記述)

提出日：2022年8月2日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 英語学科

氏名 古川 典代・川中 紀子

(1)教育実践の改善活動の成果

83クラス分を点検したが、対面と遠隔（またはハイブリット）の授業で不公正にならないよう苦心している様子がうかがわれた。前回の反省をもとに、新学期は同じ轍を踏まないよう工夫しているという記載もあった。

(2)さらに改善を検討すべき点

学生から、事実と異なる授業への不満の書き込みがあったと誤解を解くコメント記載も散見された。学生とのコミュニケーション不足によるものか、欠席がちな学生の思い込みかもしれないので真偽がわからないが、いずれにせよ学生と良好な信頼関係が築けていないクラスもあったことは否めない。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

今回の「学生による授業評価アンケート」は回収率が低いものが多く、見直しの根拠となるデータの信憑性が極めて低い。コメント表から窺い知れる実数としては、「13名中回答ゼロ」、「18名中回答3名」、「20名中回答4名」、「47名中回答5名」などの記載があった。これでは、コメントを出すにしてもエビデンスに乏しい。数字だけで、科目間の比較をすることも意味がなく、コメントすることも難しい。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

教員は学生からの意見に真摯に取り組んでおり、不満や誤解をできる限り解消するよう尽力している。学生がどのような意見を持っているかについて、教員は真摯に受け止めている様子がうかがえる。

(5)その他(自由記述)

大量のコメント表をチェックした割には、アンケートの回収率の低さから取り上げるべきコメントが少なかった。数字の羅列だけでは見えてこない部分もあり、結果をまとめるのに難儀した。自己点検票として、FD委員会では教員の負担を軽減するように考慮したアンケートフォームなので、自己点検する際に教員の労力は軽減されたことは有難い。しかし学科としてのコメントを出す際の資料としては有意義なものか、測りかねる部分はあった。

また、オンライン形式でアンケートを行うようになってから、回答率が激減していることから、可能ならば、紙媒体に戻しても良いのではないか、という意見もあった。

提出日：2022年6月22日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 日本語日本文化学科

氏名 西川 純司・丸山 果織

(1)教育実践の改善活動の成果

新型コロナウイルスの影響を受けた 2 年目にあたり、遠隔授業に対する教員の工夫の成果があったようである。特に、松蔭 manaba や Zoom などの使用について、昨年度の改善点が活かされたという意見を見ることができる。

(2)さらに改善を検討すべき点

- ・オンライン上でのテスト形式については改善の余地がある。
- ・ICT 使用時の双方向のコミュニケーションの取り方について、今後検討が必要である。
- ・女子学生を対象とするため、取り上げる内容や表現については配慮が必要である。

**(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)**

- ・学生が購入するには難しい専門性の高いソフトについて検討が必要である。こうしたソフトは、BYOD 下においてもスペックや購入費用の面で学生 PC には入れることができない。また、学科単位で導入するにはコストがかかりすぎる。そこで、こうしたソフトを整備した PC ルームを大学として設置してもらいたい。専門性が高い教育を提供するためには必要な設備であると思われる。
- ・教室におけるスクリーンやモニターの場所や見え方について、確認が必要である。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

- (1) で回答したとおり、改善の成果はみられる。

(5)その他(自由記述)

提出日：2022 年 6 月 28 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 総合文芸学科

氏名 西川 純司

(1)教育実践の改善活動の成果

遠隔授業では、各教員による創意工夫がみられた。とくに松蔭 manaba を通して学生との相互コミュニケーションが図られていたことや、動画を活用することによって授業が活性化されていたことは成果といえる。

(2)さらに改善を検討すべき点

コロナ禍での対面授業ではディスカッションを控える様子がみとれるため、今後は代替の手段を検討していく必要がある。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

総合文芸学科としての開講は 2021 年度限りとなっているため、特になし。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

問題ないと考える。

(5)その他(自由記述)

提出日：2022 年 6 月 28 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 心理学科

氏名 黒崎 優美・大和田 攝子

(1)教育実践の改善活動の成果

2021 年度後期は多くの科目で対面授業が実施されたが、これまでの遠隔授業の経験を踏まえ、専任教員・非常勤教員ともに、それぞれの科目の内容や特性に応じて ICT を有効に活用しながら授業に取り組んでいる様子が見えてきた。具体的には、manaba を用いたきめ細やかな個別指導や、学生同士の相互学習を促進する工夫などが挙げられた。一方、学生による授業アンケートの結果から、これらの授業に対して概ね高い評価が得られたことは授業改善活動の成果と言える。

(2)さらに改善を検討すべき点

ICT を活用した際、学生個々の参加や貢献の程度を把握したり、成績評価に反映させることが難しい場合がある。また、少人数のゼミ科目では、積極的に参加する学生とそうでない学生の差が大きく、学生同士の議論が活発になりにくい、などの問題点が指摘された。今後は、教員と学生という縦の繋がりでなく、学生同士の横の繋がりの中で互いに学び合う機会を増やしていけるよう工夫することが求められる。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点

(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

複数クラスを manaba でリンクした状態で授業評価アンケートを実施すると回答率に不具合が生じる(100%を超える)ため、支援の要望が出ている。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

それぞれの教員が授業アンケートの結果を受け止め、授業改善に取り組んでいることが自己点検・評価票より確認できた。よって、心理学科全体として授業改善活動は機能していると言える。

(5)その他(自由記述)

提出日：2022 年 6 月 30 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 都市生活学科

氏名 川口 真規子・稲見 直子

(1)教育実践の改善活動の成果

- ・多くの教員が ICT を活用した授業を実施し、教科に応じた工夫をすることで学生の学びを深めることができた (Dropbox や Onedrive の使用による情報共有、manaba でのレポート個別指導など)。
- ・プレゼンテーションやグループワークなどアクティブラーニングを導入した授業では、活発な議論が生まれ、学生の主体的な授業参加が促進できた。
- ・事前学習や授業内での動画視聴などを取り入れ、学生の興味関心へとつなげた。

(2)さらに改善を検討すべき点

- ・グループワークでは、自発的に参加しない (話に入らない) 学生がいる。このため今後は毎回グループメンバーを変更するなどの対応策が必要である。
- ・manaba を積極的に活用することにより、対面時 (授業中) ではなく manaba での質問が増加する事例が起きた。今後は質問のマナーなどを学生に周知する。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点

(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

(学科)

- ・インテリアコーディネート実習について、現在は 1 単位の配当であるが、内容量や重要性から考えると 2 単位配当であっても良いのではないかという意見が担当教員 (非常勤講師) から出された。実習内容等を学科内で確認し、現在の単位数が適切であるか検討する。

(大学)

- ・524 教室設置の PC が立ち上がらない・立ち上がりが遅いなど、不具合が頻発する。ICT 教育を推進するにあたり、まずは老朽化した PC の更新が必要である。現在の設備では、PC の基本操作や管理方法 (アップデートなど) を学生に説明する際にも時間がかかり、授業運営に支障をきたしている。次年度のコース制導入および更なる ICT 教育の推進の見地からも PC 環境への早急な対応が求められる。
- ・対面授業と zoom 授業を同時に行う際の操作など、PC の扱いに不安を持つ教員がいるため、全学的なサポートが必要である。
- ・集中講義での授業アンケート実施が難しいという意見があった。アンケート実施方法の改善が求められる。
- ・配慮願いが出されている学生への卒論指導の難しさについての意見があった。配慮を要する学生への対応方法の研修などを実施していただきたい。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

・いずれの教員も概ねこれまでの授業アンケートに基づいて授業内容の改善を図ってきた。今回の授業アンケートに対しても今後の改善点等を適切に分析しており、改善活動が十分機能していると考えられる。

(5)その他(自由記述)

提出日： 2022 年 6 月 23 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 食物栄養学科

氏名 小林 利寛・橋本 沙幸

(1)教育実践の改善活動の成果

manaba に講義資料を置くのみならず、manaba を活用し、授業の案内（授業前）、小テスト（授業中）、講義資料の公開及び復習ドリル（授業後）を実施するなど、manaba を活用している教員が多く見られた。また、適宜診療時のエピソードを示すなどして学生の関心を引くよう心掛ける、授業の再確認として教科書へマーキングの時間を設ける、動画教材を使用した反転学習を取り入れるなど、学生の学修成果が上がるよう工夫していた。その結果、シラバスに示された到達目標の達成状況ではほとんどの教員が「そう思う」または「ややそう思う」と答えており、教育実践の改善活動の成果があったと考えられる。

(2)さらに改善を検討すべき点

- ・学生と教員が双方向のやり取りをしながら進める必要がある。授業内容が難しいとアンケートで回答しているが、直接学生に聞くようにする。
- ・管理栄養士として必要最小限のものを選び教えるようにする必要がある。
- ・教員の manaba の設定ミスを減らす。
- ・manaba での課題提出が出来ない学生への対応が必要。
- ・高校や大学での既習分野の基礎知識が定着していない学生への対応が必要。
- ・教員が丁寧にチェックをする時間的余裕がない点について改善が必要。
- ・科目の位置付けについて意見がある教員が 1 名おり、1 年次の学修成果が上位学年の科目で確認できているかについて聞くことで授業改善に繋げるようである。
- ・学生募集（入試制度）の状況も考慮しつつ、カリキュラムについて検討が必要である。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点

(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

- ・自己点検票で経年変化が確認できる書式にして欲しいとの要望があった。
- ・過年度生のために設置された授業コード（配当年次生は別途授業コードが設定されている）で、誰も成績評価の対象とならなかった場合には、自己点検表（成績中央値）の入力を不要として欲しい。
- ・集中科目のアンケートは、第 15 回目授業の終了付近にして欲しい。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

退職者を除く全員が自己点検を行い、提出できた。

(5)その他(自由記述) 特になし。

提出日：2022 年 6 月 22 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 子ども発達学科

氏名 大下 卓司

(1)教育実践の改善活動の成果

今季も、コロナ感染の影響を受けながら対面授業を基本とした形態で授業が進められた。対面で実施こそできても、話し合い活動などに制限が生じたりなど、授業形態の変更が余儀なくされた科目もあったようである。小人数の科目が多く、学生との対話を進めながら、授業が行われていた様子が自己点検からうかがえた。

(2)さらに改善を検討すべき点

「コロナ関連の対応」に関するコメントが多かった。対面授業を基本としながらも、コロナ感染に配慮しながら演習やグループワーク等を行うことの難しさや、学生から提出される「対面授業欠席届」への対応に苦慮するといった内容が散見された。

再履修者以外の科目は、今回で終わりである。改善は教育学科へと引き継ぎたい。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

特になし。教育学科分で網羅されている。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

これまでの改善活動は機能していたといえる。

(5)その他(自由記述)

特になし

提出日：2022年6月29日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 ファッション・ハウジングデザイン学科

氏名 戸田 賀志子・山本 浩司

(1)教育実践の改善活動の成果

コロナ禍において遠隔授業が多かったため、繰り返し同じ内容を指導することで学修内容やスキルを身につけてもらうように心がけた結果、当初は PC への苦手意識を抱いていた受講生たちが自信を深め、学びを進化させることへつなげることができた。また、manaba においては、普段の授業から質問や要望を随時受け付けたり、授業前の案内、授業中の小テストの実施、授業後の講義資料の公開や復習ドリルの実施など、積極的に活用することによって学生の授業への満足度を高めた。

(2)さらに改善を検討すべき点

- ・教師からの一方通行である感が否めない。
- ・学生からの反応が感じられない
- ・授業中にスマートフォンを触ることをやめることのなかった学生がいたので、見回りもすべき
- ・出席も質問もしない学生に対してどのように対応することが望ましいのか、今後の課題としたい。

など、学生の授業に取り組む姿勢についての意見や、授業時間外の学習時間の短さについての指摘があった。引き続き改善すべき課題として取り組む必要がある。また、コロナ禍の影響で学生同士の関わりが薄く、グループワークの能力が低い学生が多いと感じられたとの声もあった。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点 (学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

授業に関しては、遠隔授業時のカメラ機能の有効化や PC 環境の改善を求める声があった。また、初めて授業を担当する教員に対する支援体制を整えていく必要があるのではないかと、という提案もあった。授業外については、産官学連携やメディア利用についてもっと積極的に取り組み、学生が在学中にいろいろな体験、経験ができるようなサポート面での強化が望まれる。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

アンケートにおいては、下記に示すような肯定的なコメントが認められた。

- ・映像やスライドを通じて学びを深めることができた
- ・ゲストスピーカーから刺激的な講義を受け、前向きに学びを展開することができた

などポジティブな意見が多く寄せられたことから、一定の効果が得られていると考える。

(5)その他(自由記述)

- ・担当を始めたときからずっとコロナ禍なので、本来行おうと思っていた板書での授業が出来ていない。改善課題の提案以前に、正常な授業形態に戻したい。
- ・回答数が少なかった事は授業への関心度が低く思いますので、今後は沢山回答いただき、より良い科目にできたらと思います。などの記述があった。

提出日：2022 年 6 月 29 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 教育学科

氏名 大下 卓司・垂髪 あかり

(1)教育実践の改善活動の成果

今期も、コロナ感染の影響を受けながら対面授業を基本とした形態で授業が進められた。こうしたなか、一部遠隔授業となった科目があったり、対面授業を行いながらもコロナ関連での「対面授業欠席届」に対応しての遠隔授業を行ったりと、自己点検を行った全ての教員が、対面授業、遠隔授業、ハイブリッドでの授業の準備、実施、評価に試行錯誤を重ねた様子が多く記されていた。

教育実践の改善活動の成果としては、多くの教員が、さまざまな ICT ツール (manaba、ZOOM、you tube など) を用いて対面・遠隔双方のハイブリッドの授業形態を柔軟に行い、学生の学修機会の保障に努めていたことである。そのなかで、Manaba の使用はほぼ定着している様子が自己点検からうかがえた。それぞれの教員からのコメントの具体例は、以下の通りである。

- ・デジタル教科書やタブレットを用いて模擬授業を行い、実際の授業で生かせるような実践力を養えた。
- ・学生の興味関心を喚起するとともに、現場の実態を知ることができるよう、施設職員や里親に Zoom で授業に参加し、学生と意見交換の時間を設けた。
- ・パワーポイントで作成したビデオを YouTube で限定配信を行った。
- ・毎回の授業は動画として保存し、YouTube で見直せるようにした。
- ・オンライン希望者と対面授業を並行させて授業を進めるために、双方に視覚的な資料を共有できるように、静止画と動画の資料提供を多くし、自主学習にも役立てるようにした。

(2)さらに改善を検討すべき点

自己点検からは「コロナ関連の対応」に関するコメントが多かった。対面授業を基本としながらも、コロナ感染に配慮しながら演習やグループワーク等を行うことの難しさや、学生から提出される「対面授業欠席届」への対応に苦慮するといった内容が散見された。「対面授業欠席届」には個別に対応が要請させること、そのことへの負担も記されていた。コロナ関連で欠席した学生への学修機会の保障はしつつ、各教員の負担を少しでも軽減していく方策を模索する必要がある。

こうしたなか、授業に対して熱心な学生とそうでない学生の二極化が見られ、その対応に教員が試行錯誤していたことも複数コメントされていた。「学生によって取り組む意欲に差がある」「関心の薄い学生にも意欲を持って取り組めるような工夫が必要である」といった具体的コメントから、学生の学習意欲をいかに向上させるかが大きな課題となっていることが明らかになった。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点 (学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

① 「対面授業欠席届」への対応について

「教員の立場では連絡に基づき適切に対応するだけであるが、正直、信ぴょう性を疑わざるを得ないものもある」といったコメントがあった。可能な限り本人の申し出だけでなく、引き続き客観的書類の確認

などを徹底していただくことを要請する。

② 施設・設備について

以下のような改善を求めるコメントがあった。

- ・7号館のパワーポイントプレゼンがテレビのため、画面が小さく、見えにくいので改善していただきたい。
- ・リズム室(545)の暖房(上から風が当たる)が一部の場所だけに直接当たり、学生らが学修しずらそうな場面が多くあり、苦勞した。部屋全体を温める(冷やす)ことができる空調をお願いしたい。

(4) 改善活動が機能しているかについての確認結果

確認の結果、各教員が、授業を振り返り、学生からのコメントに答え、さらに良い授業に向けて試行錯誤する姿勢がうかがえた。

(5) その他(自由記述)

特になし

提出日：2022年6月30日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 全学共通教育センター

氏名 木鎌 耕一郎

(1)教育実践の改善活動の成果

manaba 等の ITC を活用している授業担当者が多いのは、2020 年度からのコロナ禍の影響とはいえ、授業改善につながっていると考えられる。2021 年度後期は、ほとんどの科目で対面授業にもどったが、一部の学生に対して遠隔授業を併用しなければならない授業では、対応の仕方や情報伝達の方法に苦心された授業担当者が多かったようである。

(2)さらに改善を検討すべき点

授業評価アンケートへの回答数が少ないことを残念に思っている授業担当者が散見された。終盤の授業が遠隔に切り替わったことが主な要因と考えられる。教育実践の改善活動に必要な重要なデータであるため、授業中に回答時間を確保するなどの工夫や積極的な呼びかけが必要と考える。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

ハイブリッド型授業のスキルを磨きたいという意見があった。確かに将来的にニーズがあると思うので、FD 研修会で取り上げていただければありがたい。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

学生の授業評価を真摯に受け止め、改善を検討してくださっている授業担当者が多く見られた。

(5)その他(自由記述)

特にありません。

提出日：2022 年 7 月 7 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 キャリア教育センター

氏名 青谷 実知代

(1)教育実践の改善活動の成果

①履修生全員が自分自身の考えや意見を持ち、それらを発表できるよう、対面授業においても ICT (manaba)を積極的に活用した。(例えば、おもてなしについてのアイデアを manaba のスレッドに全員が書き込む等)次年度以降も自分の意見を発表、共有できる機会を多く設けたい。

②授業中・授業終了後も継続して学びができるようサポートをした。各自が主体的に学びができたことが成果であった。

(2)さらに改善を検討すべき点

①継続した学びを理解してもらえなかった点が課題であり、どのように改善するかを検討する。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

思っていた内容と違う、スタイルが合わないという学生がいるため、授業がスタートしてすぐに来なくなる学生もいる。履修者制限科目で、履修取消等が認められていないため、何らかの方法を考えた方が良いのではないかという意見が出された。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

学生に直接アンケートを実施したり、センターとの話し合いで確認することが必要

(5)その他(自由記述
特になし。

提出日：2022年7月16日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 情報教育センター

氏名 稲澤 弘志

(1)教育実践の改善活動の成果

各クラスともに全学共通科目の教育目標とカリキュラムポリシーに沿った授業が展開された。また、情報系列で重視している汎用的技能としてパソコンスキルを養う授業も充実してきており、ほぼ満足のいく形となっている。

各授業では、各教員ともに受講生がパソコンによる問題解決に興味を持つように、様々な工夫をした授業が展開され、特に情報系列科目で展開されている基礎情報科目の基本方針である「パソコンを用いた問題解決の能力を育成する」という、教育内容も堅持されている。

情報セキュリティや情報倫理に関しても、実際の状況を反映した題材をとり上げて解説が展開されていた。

(2)さらに改善を検討すべき点

パソコンの技術的な側面に対する学生コメントとして、難易度は「適切だった」と答えている学生が多かった。一方、僅かであるが「難しすぎる」と答えている学生もいた。このような状況に対しては、いろいろと工夫を行っているが入学してくる学生のスキルレベルにばらつきが大きいと予想されるため、受講生の状況を見ながら授業内容の難易度、また授業速度の設定に注意していく必要があると思われる。また、授業で使用する例題などの材料についてもなるべく学生の関心を引くようなものを用意することも心掛けたい。情報セキュリティや情報倫理に関しても、できる限り興味を引くような題材をとり上げたることを心掛けたい。さまざまな高等学校からの多様な学生が受講しているので、教員の授業のレベル設定などについても、より留意する必要があるかと思われる。

**(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)**

授業教室では、学生の状況をみて学生個々への対応が重要になってくるため授業時間中、情報教育センタースタッフ、TA、SAなどを動員して学生指導に当たっているが、今後もこれまで以上に授業補助のスタッフが必要かと思われる。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

授業が「難しすぎる」という学生は、かなり少なくなっていると考えられる。一方、「適切だった」と答えている学生は各授業とも多くなっている。また、学生の授業への取り組み方についても、かなり熱心に取り組んでいると思われる。これらのことより、改善活動は機能していると思われる。

(5)その他(自由記述)

特になし。

提出日：2022年7月9日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 外国語教育センター

氏名 F. Shiobara

(1)教育実践の改善活動の成果

オンライン学習を通じて、どの先生も生徒とのコミュニケーションに一生懸命だったように思います。外国語教育では、スピーキングや発音をオンラインで教えるのは難しいのですが、どの先生も Zoom、Teams、Manaba を織り交ぜて生徒のために使っていました。

(2)さらに改善を検討すべき点

反省していない先生や、生徒の回答がほとんどないクラスもありました。今後は、生徒も教師も積極的に自己反省をしてほしいと思います。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

すべての教員が ICT を積極的に活用しようとしているので、10 人以上のクラスにはプロジェクターと大型スクリーンを用意する必要がある。ライティングなど、教室よりもオンラインの方が機能する授業もあります。これらの授業をオンラインで継続することは可能でしょうか？

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

評価をよく読み、反省している先生もいます。今後、すべての先生にそうしていただくことを期待しています。各授業への対応に追われている可能性がある。これは必要なことなのでしょうか？各授業について少しコメントするだけでなく、授業全般についてもっと深く振り返っていただくことはできないでしょうか。

(5)その他(自由記述)

提出日：2022 年 6 月 14 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 教職支援センター

氏名 松岡 靖

(1)教育実践の改善活動の成果

授業評価アンケートの結果は各設問への回答の平均値をみてもかなり高く、4 以上の科目が過半を占めている。全学での FD 研修会や個々の教員による努力のおかげで、manaba や Zoom など取り入れた対面授業のスキルが相対的に上がったと考えられる。また教職課程科目では、学生による模擬授業などを含めて、対面での実施が教育効果を担保するのに役立っていると言える。

(2)さらに改善を検討すべき点

学生の中には遠隔での受講や課題提出を苦手とする者もいる。そうした学生の学修までより手厚く支援するためには、各科目での授業方法を工夫していくことが望ましい。と同時にその前提として、入学後の初年次教育で BYOD のためのオリエンテーションをさらに充実させていくことが有効ではないか。

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点

(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

入学後の初年次教育で BYOD のためのオリエンテーションを全学でさらに充実させていくことが、ICT や遠隔授業を苦手とする学生の学修を支援するために有効ではないか。この指導を個別の科目の授業で万全にすることは難しい。

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

学生による授業評価、教員による自己点検・評価、部署ごとの評価票の点検と、その本学公式サイトでの公開、というサイクルは一定の成果を上げていると思われる。また以前から実施されていた対面授業を相互に公開する FDWEEK に加えて、松蔭 manaba 上の授業コースを学内で公開する FDWEEK も、教員同士が授業実践を改善するための参考となっている。

(5)その他(自由記述)

提出日：2022 年 6 月 27 日

2021 年度後期 授業に関する学部・学科・センター点検コメント票

所属 教務部

氏名 竹中 康之

(1)教育実践の改善活動の成果

学習成果の評価に関して、「到達目標の達成状況」、「学生の課題への主体的な取り組み」、「双方向のやりとり取り組み」について、ほぼすべての教員が「そう思う」、「ややそう思う」と評価していた。各教員が継続して、manaba などのツールを用いた授業改善に取り組んでいると判断できる。

(2)さらに改善を検討すべき点

特になし

(3)改善に向け、学科(センター)として支援すべき点、大学に支援を要請すべき点
(学科が考える「FD委員会や教学が行う支援」)

- ・ manaba の機能の改善(小テスト機能で不自由を感じている教員がいた)
- ・ 前期前半に開講している科目の授業アンケート実施時期(学期末だと遅すぎるとの指摘あり)
- ・ 和室の掃除の依頼(和室には掃除が入らない)

(4)改善活動が機能しているかについての確認結果

各教員が主体的に改善活動を行なっていることが確認できた。

(5)その他(自由記述)

特になし

提出日：2022 年 7 月 11 日